

と七狐ありしが、四个は谷に落て破碎し、三狐を存すといふ、其所以を詳にせず、
〔物類稱呼^二動物〕狐きつね 關西にて晝はきつね、夜はよるのののと呼ぶ、西國にてはよるのひと
といふ、又關西にてすべてけつねとよぶ也、又歌にはきつとも詠じ、詩經にはくつねと訓たり、又
東國にては晝はきつね、夜はとうかと呼、常陸の國にては白狐をとうかといふ、是は世俗きつね
を稻荷の神使なりといふ故に、稻荷の二字を音になへて、稻荷と稱するなるべし、又晝夜とか
はりて物の名をよびわくる事あり、予思ふに婦人兒女のものにをそれ、又は物いまひする人、か
かる迂遠の説を設たるなるべし、

〔萬葉集^{十六}

有由緣井雜歌〕長忌寸意吉麻呂歌
刺名倍爾湯和可世子等、櫛津乃檜橋從來許武狐爾安牟佐武、

右一首傳云、一時衆集宴飲也、於時夜滿三更所聞狐聲、爾乃衆諸誘興麻呂曰、關此饌具雜器、狐聲
河橋等物、而作歌者、即應聲作此歌也、

〔伊勢物語^上〕昔男みちのくにまですゝるに至りにけり、そこなる女都の人はめづらかにやおぼ
えけん、せちに思へる心なん有ける、^略中さすがにあはれとや思ひけん、いきてねにけり、夜ふか
く出ければ女、

夜もあけばきつにはめなんくだかけのまだきになきてせなをやりつる

〔瑤囊抄^一〕狐ヲ命婦ノ御前ト云ハ何事ゾ、^略中狐ヲ祝フ社女神ニテマシマサバ、女官ニ準ジテ命

婦ト云フ、吳音ニミヤウプト申セルニヤ、又元來其名アル神ノ使者ナレバ云歟、人ニ可被尋也、

〔東寺執行日記私用集^二〕一命婦事

或云、昔洛陽城ノ北、舟岡山ノ邊ニ老狐有リ、夫婦、夫ハ身ノ毛白クシテ、銀針ヲナラベタル如シ、尾
ノ端アガリテ、秘密ノ五古ヲサシハサミタルニ似タリ、婦ハ鹿ノ首、狐ノ身ナリ、又五ノ子ヲタナ